カート乗り入れが好評。ヒヤリ、ハットが散見！

今シーズンから始まったショートを除くコースへのカート乗り入れが好評だ。高齢になって、「全コース内を歩いてプレーするのは辛くなった」と敬遠していたメンバーが、「カートに乗れるなら、あのコースを楽しみたい」と戻り始めている。

カートの乗り入れはコロナ禍が始まる前からの懸案だった。メンバー、ビジターを問わずプレーヤーの高齢化で、それを求める声は年々高まり、塩カンでもその準備を整えてきた。今シーズン前にはカート 15 台をあらたに導入、合計 80 台のカートをそろえて実施に踏み切った。

ティーグランドのピンクティーの先の地点まで緑に白の杭を打ち、その先から乗り入れ可能とした。グリーンの手前 50 ヤード地点に出口の表示を打ち、コース外に誘導している。乗り入れはフェアウエーのみとして、ラフへの乗り入れは出来ないが、まだ完全にはそれが守られていないようだ。

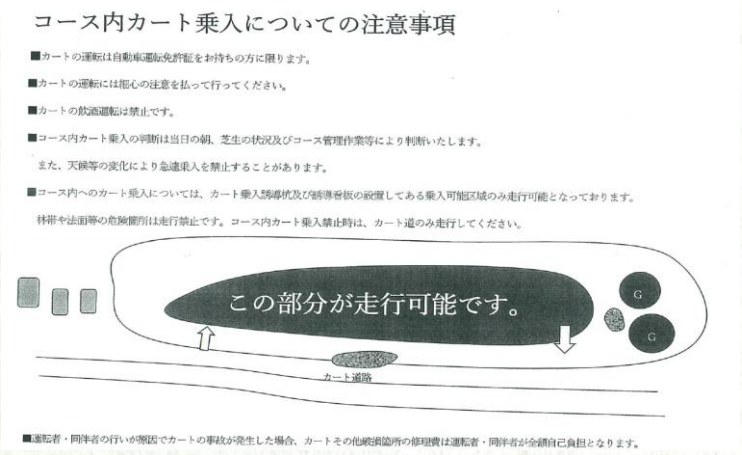
ボールが右、左にばらけた場合、ラフでもかまわずにそれぞれのプレーヤーのボールの位置に立ち寄りながら前進する組がなくもない。また、グリーンのすぐ近くまで乗り付けるカートも見られる。

カート乗り入れによる大きな事故は起きていないが、ラフの林帯に乗り入れ、大木に正面衝突、カート前輪を破損した事故があった。

幸いプレーヤーの怪我はなかったが、そこまで行かないカート運転上の「ヒヤリ、ハット」が散見される。「ヒャリ、ハット」が 20 回ごとに大事故が起きると言われており、フロントで配られる注意のパンフレットに従って欲しい。全体のプレーの所用時間は短縮されているが、エチケット無視のカート走行はそれを台無しにしてしまう。

また、長雨や真夏の日照り続きで、芝の状態に悪影響を及ぼす場合には、日によって乗り入れが中止にする場合がある。いずれにしても、ルールに則って安全で気持ちのいいプレーを楽しみたい。

【フロントで配布してる注意事項】



コース内カート乗入についての注意事項

■カートの運転は自動車運転免許証をお持ちの方に限ります。

■カートの運転には細心の注意を払って行ってください。

■カートの飲酒運転は禁止です。

■コース内カート乗入の判断は当日の朝、芝生の状況及びコース管理作業等により判断いたします。
また、天候等の変化により急遽乗入を禁止することがあります。

■コース内へのカート乗入については、カート乗入誘導杭及び誘導看板の設置してある乗入可能区域のみ走行可能となっております。
林帯や法面等の危険箇所は走行禁止です。コース内カート乗入禁止時は、カート道のみ走行してください。

■運転者・同伴者の行いが原因でカートの事故が発生した場合、カートその他破損箇所の修理費は運転者・同伴者が全額自己負担となります。

理事会開く。久々に対面で審議。

コロナ禍で長く書面審査で開催されてきた理事会が、6 月 29 日に対面で開かれた。理事会には渡辺勇雄理事長、緑川文雄キャプテンら理事・役員が出席した。

令和 4 年 4 月～同 5 年 3 月の期間に、12 人の新規加入、28 件の名義変更があり、個人正会員は前年同期より 24 人多い 1,417 人となった。また 8 人について年会費の未払いによる除名が了承された。

昨年 10 月の国体女子競技は各県選手団や関係者から「コースも素晴らしく整備されていて、いいプレーが出来た」と高い評価を受けたが、12 月以降の降雪で 18 日間のクローズがり、年間来場者は前期より約 1,400 人増の 40,989 人だったが、目標の 42,000 人には及ばなかった。今期は乗用カートのコース内乗り入れなどの新機軸で巻き返しを図る旨の力強い報告があった。

平成 31 年から来場者一人当たり 50 円を徴収してきたコース整備基金は、第 56 期にあたる令和 4 年度に 2,049,450 円の協力が得られた。これらは全額コース内の枯れ松の伐採費用に充てられたが、整備が必要な案件は増えており 50 円の値上げ案が提案され、理事会とはこれを了承した。いつから実施するかは会社側の判断に委ねた。

また、月例杯を除くクラブ競技への参加者が低調で、とくにシニア選手権への参加者が少なく、昨年度は中止になった。緑川キャプテンから「シニア選手権は伝統の大会で、ぜひ復活したい」との呼びかけがあった。役員構成で、競技委員会副会長で理事会監事の平山定光氏が退任され、競技委員の大登正雄氏が競技委員会の副委員長に就く予定。その他、役員構成については 7 月下旬に開催される分科委員会で決定する。

ボランティア登録80人超え。うち3人が新メンバーに。活動に惚れ込む。

塩カンでは昨年の国体開催を契機に、コース整備のボランティアを本格的に募集し、毎週 1 回目土入れなどに当たってきたが、〝ボランティア登録者〟80 人を超え、「こうした活動が盛んならメンバーになりたい」と 3 人の新規会員が誕生、このボランティア活動もすっかり定着してきた。

コース整備のボランティア活動は 10 年近く前、クラブの分科委員会のコース委員会が提唱したのが始まりで、クラブ役員を中心に 6,7 人で行われた。国体開催を前に本格化し、真冬と真夏を除くシーズン中、毎週月曜日の午後 2 時から同 4 時まで、毎回 30 人前後が作業に当たっている。

コース内のデポットの目土入れのほか、グリーンやティーグランド周りの雑草取り、クラブハウス周辺の植栽の剪定など作業も手広くなっている。植栽の剪定では、10 人ほどが自宅で使っている電動機械を持込み、手際よく刈り揃えた。

今シーズンは 7 月 14 日が最終作業日で、9 月中ごろまで〝猛暑休暇〟に入る。ボランティア参加者によるコンペも行われ、自前の賞品を持ち寄って、お互いに表彰し合う。プレー後の懇談ではビジターさんや近所の人もまじえて世間話に花が咲き、横の連帯も広がっている。

「コースもよくなっているし、友達を連れてくるよ」「何度か汗を流すと俺たちのゴルフ場という気になる」という声も聞かれる。その結果、「こんな雰囲気ならメンバーになってゴルフを楽しみたい」と、3人が新規会員になったという。

塩原カントリークラブ！攻略編！！【南コース】　― 中里　鉄也プロ ―

☆南コース１番 ☆

【コース解説】
緩やかな左ドックのロングホール。

【中里プロからのアドバイス】
1打目はフェアウェイ右側に松の木が2本有るのでセンターやや左を狙いたい。
2打目は逆にフェアウェイ左側に松の木が有るのでセンターやや右狙いが良い。
3打目はグリーン手前にバンカーが有り大き目に打ちたいが･･･
グリーンの傾斜が左手前から右奥にあるため手前目にのせたい。

グリーンは左手前から右奥に、左奥から右側に傾斜があるので読みにくい。

次回は、南コース２番を紹介します!!

続・那須の小天狗―小針春芳伝⑲

井上　安正

クラブ小屋

小針春芳はシニアになって間もなく、那須ゴルフ倶楽部から標高にして約四百㍍下って、後の町村合併で那須塩原市となる黒磯市内に自宅を構えた。大谷石の塀をめぐらしているのは、この辺では珍しくはない。大谷石は宇都宮が産地で、比較的安く手に入ったからだ。名前の売れたプロゴルファーだからといって、格別に目立った構えではなく、いたって質素な平屋建てだった。近所と違っているのは、母屋に接するように、四畳半ほどのプレハブの建物があることだった。

小針はこれを「クラブ小屋」と呼んでいた。愛用の机と椅子の周りには、新旧のクラブセットと単品のクラブやパターが林立していた。机にはクラブの修理や自分の体と感覚に合わせるように、クラブを進化させるための工具が並んでいた。

アプローチの練習は外の庭の隅に、網を張った手作りの練習場でやった。雨が降ると、母屋の座敷の押し入れのふすまにマットレスを立てかけ、畳の上でボールを打ったから、いつも畳はボロボロだった。雪でも雨でも、感覚を鈍らせたくなかったのだろう。素振りをするか、クラブに手を加えて、使い勝手を確かめていた。「四六時中、クラブにさわっていなければ、気がすまない」と言いたげだった。

現役の新聞記者だったころ、汚職事件の摘発に専従していた刑事から、こんな話しを聞いたことがある。「ゴルフがシングルハンデの役人さんに対しては、『何かあるな』と勘を働かせたもんです」と。この刑事によると、ゴルフは筋肉に覚えさせるスポーツだ。一秒の何十分の一の間にショットを終えてしまうから、始動した後、脳で打ち方を考えてクラブを振るという芸当は無理だ。だから、スイングの全ては筋肉に覚え込ませていなくてはならない。

ところが、生理学的に筋肉は忘っぽく、いったん覚えさせても、覚えているのは三日間がせいぜいだ。だから、実力を維持するためには、三日に一度は練習するか、ラウンドに出なければならない。公務員にそんな時間的、経済的な余裕があるはずもなく、隠された事情を抱えているはずだと見立てるという。一流と言われるプロが絶えずクラブを握り、素振りをするのは、単に感覚を鈍らせないためでだけではなく、筋肉に忘れさせないための必須条件なのだ。

小針が体を休める時、椅子に腰掛けて、缶ピースを取り出しては、紫煙をくゆらせた。小針を言わずして、ヘビースモーカーはこの世にいなかっただろう。「プロ室の灰皿は吸い殻がとがった山のように積み上がり、吸い殻の途中の隙間に差し込んで火を消していました」という。那須ゴルフ倶楽部では、何とか小針の喫煙を止めさせようとした時期もあったようだ。那須ゴルフ倶楽部の理事長がたまたま霞ヶ関カンツリー倶楽部に行って、練習中の小針と言葉を交わし、「これならたばこをやめられるだろう」と、小針のズボンのポケットにアメをいっぱい詰めてピース缶を取り上げた。

小針はだんだん落ち着かなくなり、練習の合間に一言も口を開かなくなってしまった。夢遊病者みたいな瞬間もあった。一緒に練習をしていた竹間正雄は、夕方になって再び顔を見せた理事長に「小針さんが変になってしまいました」と告げた。理事長は「ダメだったか」と舌打ちして、小針に「吸っていいよ」とピースの缶を渡して立ち去ったのを、今までも覚えている。たばこはこの調子だったが、酒は呑まなかったというより体が受け付けなかった。

小針がシニア入りしてからの戦績をみると、六十八歳からのゴールドシニア時代が最もいい。七十七歳までの九年間に、関東プロゴールド選手権を五回取っている。五十歳からのシニアでは日本プロシニアが二回、関東プロシニアが一回、六十歳からのグランドシニアでは関東プログランド選手権を一回しか取れなかった。小針はシニア入り後、年を重ねれば重ねるほど力を発揮した。

二刀流

黒磯から板室街道を板室温泉に向かうと、右手に道の駅「明治の森」がある。その一㌔ほど手前で交差して、かつて百村道路と呼ばれ、今は「りんどうライン」という愛称がついている道路が那須疎水に沿って東西に走る。板室へ向かって交差点を左折すると小針の実家、右折してしばらくすると右手にゴルフ練習場がある。そのころは、小針の遠縁が経営していた。

真っ黒に日焼けしてドライバーを手にした小柄な男と、どちらかというと長身でスポーツマンタイプの男が、打席をひとつ空けて向き合っていた。小柄な男は七十九歳になった小針春芳、長身は四十九歳の江場友幸である。

「先生、打ってみましょうか」。小針が何発か打ったスイングフォームを凝視していた江場が言った。「先生、ずいぶんヨシロウになっていますよ」。「そんなに？」と小針が驚き、そして納得して顔の表情を弛めた。

その二日前のことだった。「那須へ上がってきてくれないか」と、小針から江場の工房に電話が入った。小針が江場にプロ室へ足を運んでもらいたい時は、いつもそう言った。工房から那須ゴルフ倶楽部へは登り一方の那須街道を車で四十五分はかかる。プロ室に行くと大きなひさしの下に、一〇本を超えようかというドライバーが立てかけられていた。

小針はそのドライバーを指して、「これ打ってみてよ」という。敷かれたゴムラバーとその下コンクリートを貫通する穴が開けられ、ティーが刺せるようにしてある。小針がプロになって以来の、雨天専用のティーグランドなのだ。

江場は順番に、六番ホールに向かって打って行った。ほとんどが「オビに短し、タスキに長し」だった。「どれがいい」と聞かれて、一本を小針に差し出した。「そうだろう。オレもこれだと思う」と、その一本については、評価が一致した。すると、小針は「あるメンバーが『試しに使ってみて』と置いて帰った」と言いながら、もう一本を取り出し、「これはどうだ。三ホールで使ってみたが、全然、曲がらないんだよ」と言う。

江場が振ってみると、シャフトの強さが小針には合っていないと感じた。ただ、「曲がらない」を繰り返す小針の前なので、曲がらないように注意して何発か打って見せた。ゴルフ工房の主なら、その気になれば、どんなクラブでも真っ直ぐにボールを飛ばすだけのスキルは持ち合わせている。「ただ、試合で使うのはいつもの方がいい。これはバックに入れないで行った方がいいですよ」と何度も念を押した。小針は「わかった。明日の試合は賞金が二百万円。勝ってくるから」と返してきた。

その試合の初日の夕方、江場は工房で、（小針先生は）今頃は、明日の決勝に備えて、パットの練習でもしているかなと想像をめぐらしていた。そこへ小針がしょんぼりと顔を出した。江場は素っ頓狂な声で聞いた。

「先生、一日早いじゃないですか」
「うん。ドライバーのバックスイングが上がらなくなってしまって……」
「あのドライバーを持って行ったんじゃないでしょうね」
「うーん……。そうなんだ」
江場が「バックには入れないように」と念を押したそのドライバーを、小針はバックに入れて行っていた。そのうえ、エースクラブをロッカーに置いてスタートしてしまい、試合ではそれだけを使うほかなくなってしまった。
1番は右に大きくスライスさせ、林の中に入れてボギースタート。いくつかのボギー、ダブルボギーさえもあって、上がったスコアは86。「生涯で最悪のスコアだった」と悔やんだ。「だから言ったじゃないですか」と少し強めに言いながら、セットアップして体を回してもらった。
明らかに左肩が下がりすぎて、突っ込む構えになっていた。「先生」と言われるほどの人でも、知らずに出てしまう悪いクセがある。小針の場合は、左肩が入り過ぎてしまうことだった。「そうか。そんなに？それじゃこれからボールを打ってみる。見てくれないか」と江場を誘った。そして、二人が向かったのが青木の練習場だった。
「中島常幸から『バックスイングが上がらくなった』と相談されて、『ここに上げよう、そこに上げなきゃと思うな。上がったところから降ろせばいいと言ったら、中島の迷いも飛んだ』。先生、この間そう言ったじゃないですか」。小針は自分が言ったことはすっかり忘れて、自分が悩まなければならなくなっていた。こういう現象は、ゴルフではよく起きる。それが、ゴルフの奥深さであり、難しさなのだ。
林由郎と言えば体が柔らかく、肩を十分に入れて上体をひねり、そのエネルギーを解放する勢いでボールを飛ばす。小針のように体が硬い人には、それは難しい。体をひねろうとするあまりに、体の軸がずれ、ミスショットにつながり易い。小針と江場の間では、肩が突っ込み過ぎている時は、「ヨシロウさんです」と指摘するのが、いつの間にか符丁になっていた。
自分のスイングに合わないドライバーを使ったことで、肩の入れ具合に悪影響を及ぼしたに違いない。練習でドライバーに合わせて、ボールが曲がらないように打つだけなら、プロに取ってはそう難しくはない。ただ、自分の体を合わせようとして打っているうちにフォームは崩れる。肩が入り過ぎるのは、その結果にほかならない。「わかった」。小針は気持ちの切り替えが早い。この練習場の周りの生家近くの景色は小針の心の中の原風景と重なっており、余計に素直になれたのかも知れない。
小針はこの一件から、新しいクラブを試合で使ってみようと思い立っても、それまでのエースクラブをロッカーに仕舞わずに、必ずどちらもバッグに入れてスタートするようになった。二〇〇六（平成一八）年、アメリカのフィル・ミケルソンがフェード用とドロー用のドライバー二本を駆使してマスターズに勝って、日本では「二刀流」とメディアに取り上げられた。これを知った小針は茶目っ気たっぷりに江場に言った。
「二刀流ならワイの方が先だよな」

（つづく）

塩カン練習場にヤーデージ設置⛳

練習場の50,100,150ﾔｰﾄﾞの位置に、グリーン地に黄色のヤーデージが立てられた。

北３番でエースを達成したメンバーさんから記念に一部寄贈されました。

編集後記

久しぶりの顔を会わせた理事会だった。会社側から報告された来場者数や営業成績は手放しで喜ぶような数字ではなかったが、乗用カートのコース乗り入れの上々の滑り出しは、今後の光明の一筋になった。コース整備基金の50円値上げを了承した裏には、使い道の透明化の願いが込められている。国体開催以後、休刊していた「Web会報　塩原」を復刊したのも、その透明化を少しでも手伝うことになればと思ってのことだった。三月に一回位のペースで、コース情報をお届け出来ればと願っています。

井上　安正